

問題解決型タスクにおける日・英語話者の視線について：

談話データ「Mister O コーパス」にもとづく一考察*

A Pilot Study of Gaze in Japanese and English Negotiation Tasks:
Findings from “Mister O Corpus”

片岡 邦 好

KATAOKA Kuniyoshi

愛知大学法学部

Faculty of Law, Aichi University

E-mail: kkataoka@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

The purpose of this pilot study is to examine particular patterns of eye gaze in Japanese and English negotiations through quantitative analyses of a problem-solving task. I will first elaborate on the spatial arrangement where the task was conducted, and relate it to previous findings obtained from face-to-face conversation. Then I will consider some differences (as well as similarities) in the eye gaze patterns across those languages, and propose that gaze and utterance are collaboratively realized in congruence with culturally and linguistically constructed communicative habitus of each language.

The current results—relative independence of gaze from utterance in English and higher degrees of lamination of them in Japanese—still need to be confirmed by a larger sample and more sophisticated statistical methods, but if these being the case, different degrees of (de)coupling of gaze and utterance could be seen as variable realizations of cross-modal harmony, which coordinately serve as organizing principles for each language.

Keywords: gaze, negotiation/problem-solving task, comparative study of Japanese and English

* 謝辞：本稿は、科学研究費 基盤研究（B）「アジアの文化・インターアクション・言語の相互関係に関する実証的・理論的研究」（平成14～17年度 課題番号15320054）による研究助成をうけて執筆されたものである。また本稿の執筆にあたり、当該研究組織の構成員および第9回国際語用論学会（2005年：イタリア）のパネル参加者から多くの貴重なコメントをいただいた。この場を借りて謝意を表したい。

1. はじめに

会話における視線の相互交渉的な役割と機能が指摘されて久しいが (Kendon 1967; Goodwin 1980), 従来の談話研究で詳細に扱われてこなかった対象に, 対面以外の環境における視線の出現様式と言語間較差の問題がある。本予備研究では, この2側面について, 問題解決型タスクの達成に向けた相互交渉的方略としての視線を考察する。

Kendon (1990) は社会的な遭遇形態を分析するためのユニットとして, 複数の参加者が均質的, 直接的, かつ排他的に参加しうる空間的な配置・指向性をF-隊形という概念を提出した。F-隊形においては, 参加者が相互の重複する作業領域を共有する形でインタラクションが展開される。この典型的な事例はもちろん参加者2名の対面遭遇であるが, 参加者の人数, 相互間の距離や角度, 周辺環境に応じて, 分割された空間の形態とテリトリーも変化していく。また, 形成される空間が円環状かつ均等に展開するのみならず, インタラクションの目的と機能に応じてL字型配置や横並び型配置も出現しうる。本稿では, 2名の参加者による「横並び型」配置の作業空間が焦点となっている。

また本研究のデータには, 明瞭な「捻作」(身体の捻りを伴う動作: Body torque) (Schegloff 1998) を伴う事例は少ないが, 協働してタスクをこなす必要上, 少なくとも身体と頭部を内側に向けるという姿勢を維持する必要がある。そして視線を向ける際にも, この姿勢を維持するか, 場合によっては身体と頭部のさらなる移動を伴う必要があるため, 対面の場合と比べてかなり有標な, つまり生起しにくい行為であろうと推測される¹⁾。この点で, 本研究の空間設定では対面配置よりも明瞭かつ選別的な生起例が期待できる一方, 当然日常会話よりも長時間に渡るデータ観察が必要になってくる。

このような空間設定において, 視線を向けるという行為, つまり「注視」はどのような役割を担っているのでしょうか。少なくとも日本語・英語話者にとっては, 会話への参加者が相互に視線を向けることは何ら特別な行為ではないが, そこに性差や文化差が介在する点は広く認められている (Duncan & Fiske 1977; Cook 1977)。また, 視線に関しては様々な分野で膨大な研究がなされており, その談話機能に限っても, 興味関心の有無の伝達, 親密度の調整, 感情表現の手段, 肯定的・否定的な影響力の行使手段といった社会心理的なものから, 疑問の提示や返答の要求に始まり, 会話のターンやナラティブの構築における調整機能に至るまで多くの提案がなされている。また, 視線を一律に捉えるのではなく, 「注視」(gaze) —他の参加者の目(周辺)あるいは顔面上部を見る—と「相互注視」(mutual gaze) —2名の参加者が同時に注視を行う—に分割して論じられることも多い

1) 事実, 以下で述べるように本データにおける注視 (gaze) の発生率, 継続時間は従来の知見に比べてかなり低い (V.4. 節参照)。

(Cook 1977)。(また、相互注視はとくに「視線接触」(eye contact)と呼ばれる。)

本研究に関わる先行研究として、定量的分析については主に社会心理学が、定性的分析については会話・談話分析における知見が深く関わっている。例えば、古典的な社会心理研究からも (Hearn 1957; Weisbred 1967), 社会的上位者は下位者に比べより多くの視線を受容するのみならず、視線を返さない受容者に対して、話者はより多くの権威とコントロールを感得することが知られている。しかし同時に、話者の揺るぎのない注視は権勢と威嚇の行使となりうる (Eibl-Eibesfeldt 1975)。またアメリカでは、聞き手は話し手の目を注視して応答することが期待されるのに対し、日本では視線接触を避けて話し手の顔面周辺に焦点を当てるよう習慣付けられているとされる (Burgoon et al. 1994)。

一方、談話・会話分析における視線研究については、Kendon (1967), Goodwin (1980) をもってその嚆矢とする。Kendon (1967) によれば、話し手は自らが話す時よりも相手が話す時により視線を向け、自らが話し始める時には視線をずらし、終結するときに再び聞き手に視線を向けることが指摘されている。同様に Goodwin (1980) は、ビデオ・データを用いて日常会話を分析し、視線の出現がターンの開始時および終了時、そしてナラティブの「頂点」に収束することを確認して、言語的要素のみならずマルチ・モーダルなキューが談話構成と社会的関係の構築に深く関わることを示した。日本語においても、Hayashi, Mori & Takagi (2002) らの研究が示すように、視線と言語構造および他のジェスチャーとの協調・協働が確認されている。またこのような流れは、「視線」の働きをより大きな社会行為の達成と社会構築の一環として捉える研究—例えば法廷場面 (Goodwin 1994), 科学教材分析 (Lynch 1988), 協同タスク遂行 (西阪 1997) など—へと発展を遂げている (浦野 2004)。

さらに、定量的分析と定性的分析を融合させた研究として Gullberg (2003), 伝・榎本 (2005), 坊農・片桐 (2005) などがある。例えば坊農・片桐 (2005) は、対面会話 (ナラティブとポスター発表) における視聴覚データを用いながら、話し手は発話終了直前に聞き手に向けた「視線配布」を開始し、聞き手は話し手の視線配布に対してうなずき等の応答を行うことを確認した²⁾。そして、従来のジェスチャー研究における分類—指示的機能と対人的機能—に加え、叙述的視点と相互行為的視点が共起するという可能性 (彼らが「視点の二重性」と呼ぶ特性) を示した。

これらの最近の研究に共通して言えることは、コミュニケーションを言語的側面のみならずマルチ・モーダルな要素との協働において捉えようとする視点である。様々な言語において「視覚」が (相互) 理解のメタファーとして用いられるが、単なるメタファーを超

2) 坊農・片桐 (2005) における「視線配布」とは、McNeill らの定義に基く「準備」部分を含んだ「視線句」の単位を指している。

えて、視線を含む非言語的要素の研究が実際の言語活動の根幹を解き明かす重要な対象となりうることを物語っている。

II. 研究の目的

本予備研究では、以下の2点を中心に考察を重ねているが、本論考においては紙面の制約上(1)について当面の研究結果を提示する。(2)については、近年のマルチ・モーダルな分析手法を援用して別稿にて詳細な分析を提示したい (Kataoka in preparation)。

- (1) 日英語の問題解決タスクにおける「注視」について、言語差・文化差が如何に関わるかの量的考察
- (2) 具体的な視線運用に基き、どのような社会的・認知的行為が達成されるかに関する質的考察

以下で順を追って検証するように、従来各所で論じられてきた日本語の対人協調指向と英語における命題中心的なコンテキストからの自立性が、視線配布という非言語的行動においても確認される点を指摘する。

III. 参加者およびデータ

本研究の談話データ収集に際し、『ミスター・オー (Mister O)』(Lewis Trondheim 著) という大人向けの絵本を用いた。当著作の1頁中(全60コマ: 図1参照)から15コマを選んで図版にしたもの(図1中の太枠のコマ)を2名の被験者に手渡し、その限られた情報から最も自然なストーリー展開となるように、協議のうえカードを並べ替えて物語を作成するという課題を課した³⁾。課題の参加者は、日本語・英語を母国語とする東京および東京近郊在住の成人女性である。よって考察言語は日本語および英語である。本論考では、社会的要因として「上下意識」(学生対教員ペア)のみを取り上げ、その他の要因(例えば「親疎」)は便宜的に考慮していない。

今回の分析に用いたのは、全データ(日本語26ペア、英語22ペア)中、順次無作為に抽出した各言語8ペアずつ(学生・教員4ペア、学生同士4ペア)である。ただし、異な

3) データ収集に際しては、「文化的基盤における差異が日本語と他言語の言語間比較において端的に表出すると考えられる言語現象」をより効果的に抽出するための、コントロールされながらも自然であるという、一見二律背反的な課題を満たす方法論を考案した。ここでは日本語と他言語を公正に「比較」することが鍵となるため、データを産出させるためのテーマや環境は、(1)できうる限り文化的に中立であり、(2)言語・非言語双方の外部刺激に対する言語行動(non-verbal含む)の産出を促進し、(3)単独の話者によるものでなく、複数の話者が協働/協議の末に達成する課題を含むという要件を定め、本タスクを設定した。

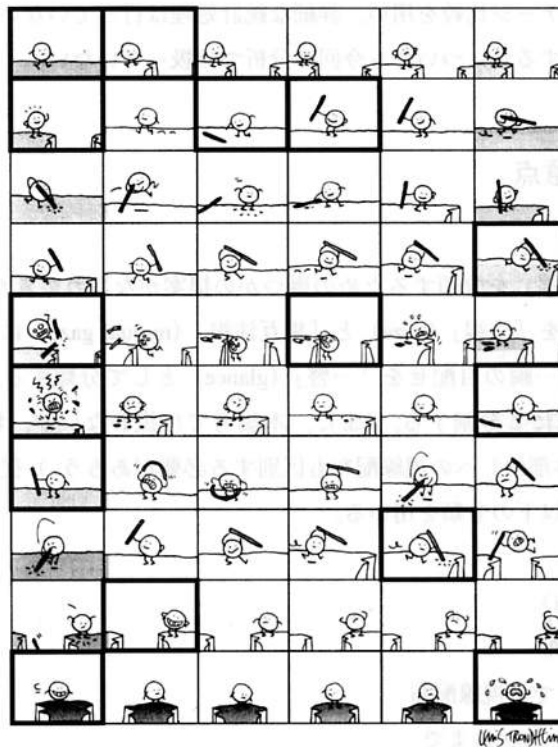


図1. ミスター・オー物語 (1頁中の全図版)

MISTER O, by Lewis Trondheim © GUY DELCOURT PRODUCTIONS (France)

るペアのタイプに同一被験者が参加することもあったため、それぞれのタイプには別の頁から選定した異なるセットを提示した。課題達成までの全体の平均所要時間は約7分30秒であった。(課題達成までの実質収録時間を以下に示す(表1)。しかしペア間で所要時間に大きな差があったのも事実である。)以下の分析では、主に各言語およびペア・グ

表1. 各ペアの課題達成時間一覧

| ペアのタイプ | | 日本語 | 英語 |
|--------|------|-------|-------|
| 学生・教員 | ペア1 | 10:34 | 4:46 |
| | ペア5 | 5:32 | 6:36 |
| | ペア9 | 7:21 | 3:36 |
| | ペア13 | 13:58 | 8:19 |
| | 小計 | 37:25 | 23:17 |
| 学生同士 | ペア2 | 6:43 | 4:12 |
| | ペア6 | 5:45 | 14:27 |
| | ペア10 | 6:12 | 7:54 |
| | ペア14 | 7:32 | 7:01 |
| | 小計 | 26:12 | 33:34 |
| 所要時間合計 | | 63:37 | 56:51 |

ループ間のパーセンテージ比較を用い、詳細な統計処理は行っていない。また各要因がどのように相関、競合するかについても今回の分析では扱っていない。

IV. 分類上の留意点

1. 視線の分類

これまでに「視線」を分類するための幾つかの提案がなされてきた。上述のように、参与者間の視線接触を「注視」(gaze)と「相互注視」(mutual gaze)に分類する手法に加え、本論考ではごく一瞬の目配せを「一瞥」(glance)として分類する。また、注視の継続時間に応じてさらに2分割する。(また、本論考では扱わないが、将来的には対象物〔例えばカード、身体部位〕への視線配布も区別する必要があるだろう。)従って継続時間と視線のタイプに添って以下の分類を用いる。

〈参与者間の視線配布〉

・ 1名による視線配布

一瞥: 0.3秒までの視線配布

注視: (1) 0.3秒以上0.8秒まで

(2) 0.8秒以上

・ 2名による視線配布

相互注視

視線配布について補足すると、坊農・片桐(2005)はMcNeill(1992)によるジェスチャー句の時系列上の構成素(「準備」-「ストローク」-「撤回」)を援用し、視線を捉える試みとして「視線句」という概念を提案している。ただし今回のデータでは、参与者は協働タスク遂行のためにすでに相手に指向する姿勢を保持しているため、目標への視線の「準備」期間を経ずに、一瞬のまばたきで「ストローク」にあたる視線配布を達成することが可能である。このため「準備」(および「撤回」)に当たる遷移区間に極端なばらつきが見られた。したがって、生起例に共通する特徴として「視線がパートナーに到達した時点」での発話との共起関係(発話前/発話中/発話後)に加え、到達の瞬間からの視線の継続時間を主な調査項目とした。

2. コーディング項目

本予備研究では、便宜的に以下の項目をコーディングした。しかしこの論考で取り上げるのは、主に言語差が観察された項目である。また、他のジェスチャーや応答の合図

(reactive tokens), 「捻作」などについては, 今回の予備調査では顕著な傾向を特定することができなかった。特にこれらは出現の環境が限られていること, ペア間の差が大きいことなどから, 計量的分析よりもインタラクションに焦点を当てたマルチ・モーダル分析においてより有益な考察が可能と思われる。(よってこれらの分析は別稿のにおいて扱うものとする。)

〈言語的要因〉

- (1) 使用言語 :
 - a. 英語
 - b. 日本語
- (2) 視線と自己の発話との共起 (有/無) :
 - a. 有 ⇒ 自己の発話行為のタイプを同定
 - b. 無 ⇒ 他者の発話行為のタイプを同定
- (3) 発話行為のタイプ (Searle 1983; de Sousa Melo 2002) :
 - a. 「心から世界」への一致 b. 「世界から心」への一致
 - c. 双方向の一致 d. 一致の不在

〈視線的要因〉

- (1) 目標上での視線の継続時間 :
 - a. 0.3秒まで
 - b. 0.8秒まで
 - c. 0.8秒以上
- (2) 受容者の顔面への視線配布のタイミング :
 - a. 発話前
 - b. 発話中
 - c. 発話後

〈社会的要因〉

- (1) ペアの社会的関係
 - a. 均衡 (学生同士)
 - b. 不均衡 (学生対教師)

図2に示したのは英語話者 (社会的に不均衡なペア) の視線配布をコーディングした例である。ここでは話者A (左側: 学生) と話者B (右側: 教師) の協議中, 話者Aが “He

climbs down?” という「発話中」(during), 「自己の発話」とともに (self), 約0.1秒間, 「世界から心」(W – この場合「疑問」) という方向性を持つ発話行為と共に視線を配布したことを示している。

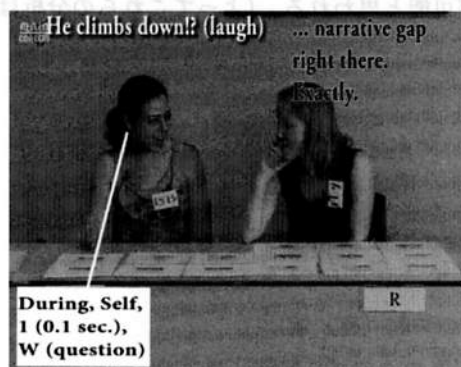


図2. 視線のコーディング例 (英語)

V. 計量的分析

以下では、上述の項目と分類に基づいて集計した結果をもとに、(1)視線配布は発話のどこで起こるか、(2)視線配布は社会関係の不均衡に影響を受けるか、(3)視線配布は誰の発話に付随し易いのか、(4)視線配布の継続時間にはどのような分布があるのか、そして(5)視線配布はどのような発話行為と生起し易いかにについて順次考察する。

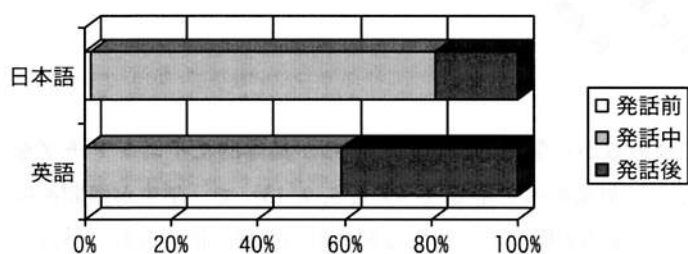
1. 視線配布は発話のどこで起こるか

まず表2は、日本語と英語におけるペアのタイプ毎(学生対教員, 学生同士)に、ペア内の参与者A, Bが視線配布を開始したポイントがどこか(発話前/発話中/発話後)を示したものである。この表中では、注視の配布時間の長短に関わらず、生起した場合は全て1回に集計してある。予備研究のため生起の実数が限られており、現時点で確定的なこととは言いにくい、少なくとも以下の点で明瞭な差が見られた。

- (1) 日・英語とも、「発話前」に視線が対話者パートナーの顔面に到達することは(例外的な事例を除いて)なかった。
- (2) 日・英語とも、ペアのタイプに関わりなく「発話途中」に視線がパートナーの顔面に到達する比率が最も高く、日本語の方がその頻度が高かった。
- (3) 日・英語とも、ペアのタイプに関わりなく「発話後」に視線がパートナーの顔面に到達する比率が比較的高く、英語の方がその頻度が高かった。

表2. 各ペアごとの視線配布のタイミング(上) および総計に基づく比率グラフ(下)

| 言語 | | 日本語 (63' 37") | | | | | | | 英語 (56' 51") | | | | | | |
|-------|--------|---------------|---|----------------|----|---------------|---|-----|--------------|---|---------------|----|---------------|----|-----|
| 視線配布 | | 発話前 | | 発話中 | | 発話後 | | | 発話前 | | 発話中 | | 発話後 | | |
| 被験者 | | A | B | A | B | A | B | 計 | A | B | A | B | A | B | 計 |
| 学生対教師 | Pair1 | 1 | 0 | 21 | 3 | 8 | 3 | 36 | 0 | 0 | 2 | 2 | 1 | 0 | 5 |
| | Pair5 | 0 | 0 | 1 | 1 | 2 | 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | 8 | 9 | 5 | 22 |
| | Pair9 | 0 | 0 | 12 | 3 | 1 | 0 | 16 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 2 |
| | Pair13 | 0 | 0 | 7 | 14 | 0 | 2 | 23 | 0 | 0 | 16 | 19 | 8 | 7 | 50 |
| | 小計 | 1 | 0 | 41 | 21 | 11 | 5 | 79 | 0 | 0 | 18 | 31 | 18 | 12 | 79 |
| 学生同士 | Pair2 | 0 | 0 | 12 | 10 | 1 | 7 | 30 | 0 | 0 | 0 | 5 | 0 | 1 | 6 |
| | Pair6 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 6 | 18 | 18 | 4 | 46 |
| | Pair10 | 0 | 0 | 13 | 1 | 1 | 0 | 15 | 0 | 0 | 4 | 2 | 1 | 0 | 7 |
| | Pair14 | 1 | 0 | 3 | 11 | 0 | 1 | 16 | 0 | 0 | 5 | 2 | 5 | 3 | 15 |
| | 小計 | 1 | 0 | 29 | 22 | 2 | 9 | 63 | 0 | 0 | 15 | 27 | 24 | 8 | 74 |
| 総計 | | 2 (1.4%) | | 113 (79.6%) | | 27 (19.0%) | | 142 | 0 (0.0%) | | 91 (59.5%) | | 62 (40.5%) | | 153 |



この結果から、横並び型配置において「発話前」には実質的に視線配布が生起しておらず、「発話中」と「発話後」に集中していることがわかる。両言語において発話中に視線配布を行うことが一種の規範的行為に見えるが、日本語では「発話中：発話後」の生起比率がほぼ「4：1」であるのに対し、英語では「3：2」となっており、英語における発話後の相対的な生起率が日本語の2倍以上高いことがわかる（40.5%対19.0%）。この点で、英語の視線配布は発話の終了（ひいてはターンの終了）をより明瞭に指標するマーカーとなる可能性が高そうである。

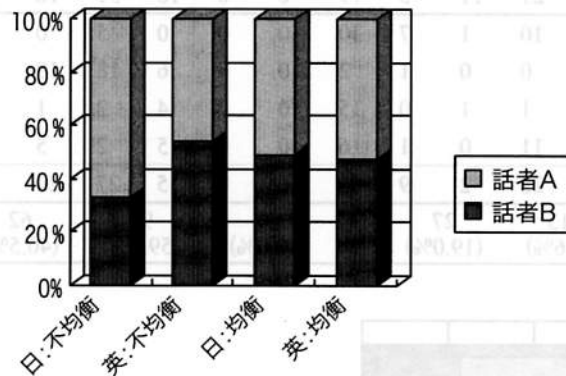
2. 視線配布は社会心理的な不均衡に影響を受けるか

表2に見られる観察は視線配布のタイミングだけに絞ったものだが、同表中のペアのタイプを抽出することで社会的関係の不均衡が及ぼす影響を垣間見ることができる。表3は、表2に基づいて言語差とペアのタイプに沿って集計したものである。表3から明らかにように、日本語においては「学生対教員」のペアの場合、学生が教員の2倍以上の視線配

布を行っていることがわかる。

表3. 社会的関係と視線の生起頻度(上)およびカテゴリー別の比率グラフ(下)

| ペアのタイプ/言語 | 日本語 | 英語 |
|-------------------------------|----------------------|----------------------|
| 学生(A)対教師(B) (asymmetric-%) | 53:26 (67.1:32.9) | 36:43 (45.6:54.4) |
| 学生同士(A, B) (symmetric-%) | 32:31 (50.8:49.2) | 39:35 (52.7:47.3) |



また、(やや直感的判断ではあるが) 学生と教員のどちらが具体的にイニシアチブを取って交渉を進めたかを見ると、対象のペア全て(ペア1, 5, 9, 13)で「学生が展開を提案し教員が追認する」という「作業対監督者」的な役割分担が即席に形成されていることが見て取れた。この分担業務形成は決して偶然の産物ではなく、恐らくある社会内部で暗黙のうちに踏襲される人間関係の鋳型なのであろう(上述 Hearn 1957; Weisbred 1967 参照)。そしてこの役割分担形式が、視線配布を繰り返す下位者と視線を受容する上位者という身体性に基いた社会的ハイアラーキーの投影機となっていると推測される。また、ここで忘れてはならないのがこの分業を実践するための言語使用である。この点で両者が用いた発話行為のタイプとの関連が予測される。(この点については V.5. 節でさらに詳しく考察する。)

友人同士のペアについては、日本人の2つのペアで両者同等の積極性が見られ、残りの2ペアでBがイニシアチブを握る展開となっているが、それほど大きな視線頻度の差は見られなかった。一方アメリカ人の会話においては、学生对教員の場合も学生同士の場合も、視線配布の上では顕著な差は見られない。この現象は、従来指摘される、アメリカ人のカジュアルで平等主義的な人間関係を志向する言語文化規範の反映と言えるかもしれない。

3. 視線配布は誰の発話に付随するのか

視線配布は発話者のみが行うわけではなく、当然発話の受容者が行うこともある。本データ中で視線配布が生じた場合、それが発話者本人の発話に付随するものか（自己の発話）、あるいはその発話に対して他者が行ったものか（他者の発話）を示したのが表4である。ただし十分予測されるように、誰の発話に「付随」するかを特定するのは常に容易なわけではない。たとえば例(1)で、BからAへの注視（下線部）がAの発話に後続したのか（「発話後」）、あるいはBの発話に先行したのか（「発話前」）を決定することは容易ではない。本研究では、このような場合会話の線状性と因果性に準拠して一つまり、前の発話がなければそれに続く発話（そして注視も）生起しないとの予測、およびAからBへの確認に対する「応答」としての視線という判断に基づき「発話後」とコーディングした。

(1) 【ペア1】

A: 大丈夫よね？

B: はい、大丈夫だと思います。

表4. 視線の付随する発話者タイプの頻度（上）および各比率グラフ（下）

| 付随のタイプ | 日本語 | | | | 英 語 | | | | 計 |
|--------|-------|----|-------|---|-------|----|-------|----|-------|
| | 自己の発話 | | 他者の発話 | | 自己の発話 | | 他者の発話 | | |
| 被験者 | A | B | A | B | A | B | A | B | |
| 学生対教師 | 39 | 22 | 14 | 4 | 14 | 35 | 22 | 8 | 158 |
| 学生同士 | 31 | 28 | 1 | 3 | 22 | 29 | 17 | 6 | 137 |
| 総計 | 70 | 50 | 15 | 7 | 36 | 64 | 39 | 14 | |
| | 120 | | 22 | | 100 | | 53 | | 295 |
| 比率 (%) | 84.5 | | 15.5 | | 65.4 | | 34.6 | | 100.0 |

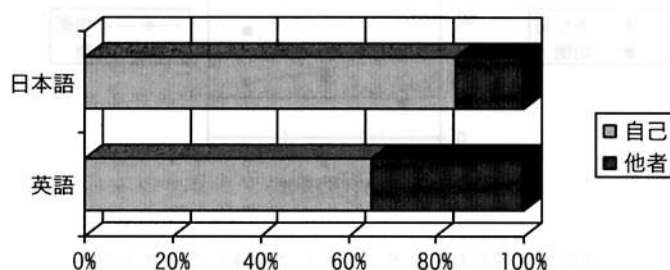


表4を見る限り、言語別の発生率だけでは大きな差は感じられないかもしれない。しかし英語では、受容者が発話者に視線を向ける場合（N = 53）に比べ、発話者が発話中に他者に視線を向ける場合（N = 100）の比率が2倍程度なのに対し、日本語ではその生起

比率が5倍以上(22対120)となっている点は注目すべきである。つまり、視線を向けるという行為に関して、日本語では話者自身の発話に端を発することが圧倒的に多いのに比べ、英語では他者の発話に対して視線を向ける頻度が相対的に高いことがわかる。この差異は、「視線」の持つ権威指標的な特性と⁴⁾、「相手を見ること」にまつわる文化的含意の乖離ゆえに形成された、「威嚇的な英語話者」と「臆病な日本語話者」などのステレオタイプを生む一因ともなっていると考えられる。

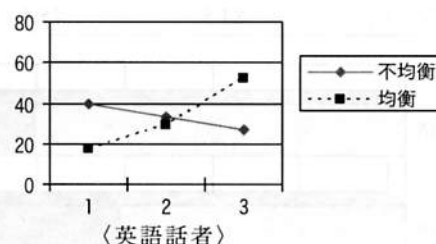
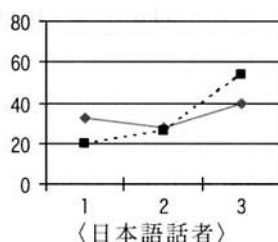
4. 視線配布の継続時間にはどのような分布があるのか

従来の研究結果(例えば Duncan & Fiske 1977)から、対面の会話と本研究における横並び型の会話とは視線の継続時間が大きく異なることが予測される⁵⁾。(ただし計測方法が異なるため単純な比較はできない。また、視線の継続時間は10分の1秒単位によるカテゴリーへの分類のみで、個々の事例の厳密な計測は行っていない。)

表5. 社会関係に基づく視線の継続時間(上)と各言語の傾向(下)

* 上述の分析では分類できなかった事例でも継続時間は計測できるため、表3, 4, 5における合計よりも若干総数が大きくなっている。

| | 継続時間 | 日本語 | 英語 |
|-----|---------------|-----------|-----------|
| 不均衡 | 1(to 0.3sec) | 27(32.5%) | 31(39.7%) |
| | 2(0.3-0.8sec) | 23(27.7%) | 26(33.3%) |
| | 3(0.8sec.-) | 33(39.8%) | 21(26.9%) |
| | 小計 | 83 | 78 |
| 均衡 | 1(to 0.3sec) | 13(20.0%) | 13(17.6%) |
| | 2(0.3-0.8sec) | 17(26.2%) | 22(29.7%) |
| | 3(0.8sec.-) | 35(53.8%) | 39(52.7%) |
| | 小計 | 65 | 74 |
| | 総計 | 148* | 152* |



4) 高等哺乳類において、揺るぎのない注視は威嚇や制圧のサインとして発達したと考えられている(Eibl-Eibesfeldt 1975)。

5) あくまで参考だが、本研究では英語話者の場合1分間に約2.7回、つまり約22秒に1回の割合で視線配布を行っている。一方 Duncan & Fiske (1977:80-85)によれば、アメリカ人「対面」会話の場合、自らが話をしているときの注視発生率は約5秒に一回で継続時間は平均3.2秒、話をしていないときは約7秒に一回で平均7.8秒継続したとの結果がある。

表5から全般的に明瞭な差異は認められないものの、むしろ興味深いのは視線の継続時間をペアのタイプごとに分類した場合の共通点である。表5のグラフより、(日本語話者の場合「不均衡」カテゴリー3でわずかな逆転がみられるが)日・英語双方を通じて(特に英語で顕著に)、参与者間の社会的関係が「均衡」である場合はより長い視線配布を維持し、逆に不均衡である場合は継続時間の短い注視・一瞥がより増加する傾向にあることがわかる。この結果は、参与者が協力的でお互いに好意を抱くほど直接的な注視が増加し、逆に異議を唱えたりお互いを嫌悪する場合に注視が減少する傾向(Argyle & Dean 1965; Argyle 1988)と完全に一致するわけではないが、心理的距離を調整する方略として視線を用いる点では一致している。

5. 視線配布はどのような発話行為と生起する傾向があるか

これまで見てきたように、注視の生起は言語・文化差、話者間の社会的地位の相違、発話への付随度のみならず、発話行為を行う際の対人的配慮や本タスクにおける発話対象(主にカード)への操作意図が関与することも考えられる。こういった要因に加え、ひとつの発話に複数の発語内行為が埋め込まれる可能性もあり、必ずしも1つの発話行為を形式的に同定できるわけではない(Labov & Fanshel 1977; Schegloff 1991)。したがって以下では、視線と発話行為の一対一の対応関係に目を向ける代わりに、ある発話によって達成が予想される「心と世界」の「一致の方向」(Direction of fit: e.g. Searle & Vanderveken 1985)による対応関係(Searle 1983; de Sousa Melo 2002)に沿って、本データ中の発話と注視の関係を考察する。

一般的な遂行動詞の分類に代えて、当該の分類を選んだ理由はいくつかある。まず最初に言語間比較の問題がある。つまり、英語をもとに定義された遂行動詞の概念が果たして日本語の遂行動詞の概念とどの程度一致するのかという問題であり、この議論は往々にして普遍性の主張の陰に隠れて捨象されたままである。しかしSearle (1983)やVanderveken (1990)の後の主張に見られるように、発語内行為は思考の行為であり、思考概念単位であると想定することでこの問題の一部は回避できる。少なくとも、語彙間の完璧な対応関係に苦慮するよりは、発話のコンテキストにおける意図に焦点を当て、発話行為を外界に向けた心の動きと捉え直すことで、このような齟齬はある程度軽減できると考える。

また従来の遂行動詞の分類方法には、発話に付随する(あるいはしない)行為を分類することの難しさがある。たとえばReiss 1985には、チンパンジーが食べ物をおねだるジェスチャーから伝達の力と命題内容を読み取る試みがあるが(Reiss 1985: 49-56)、その妥当性には未知の部分がある。また、そのような明確な意図を持った非言語のみならず、「えーっと」や「うーん」などの発話とそれに伴う注視をどう分類するかといった問題が依然とし

て残る。また発話はしばしば中断されたり、コンテキストに応じた意味に拡張されて、分析者間での判断も揺れがちである。したがって、命題的な「発話」のみに依拠した分類には常に不確定要素が伴う。そこで上述のような曖昧な例の場合、話し手と聞き手の関係や協議の流れから、発話によって達成することを目指した「心と世界」との対応関係に注目した。つまり、言葉（あるいは非言語）を通じて、世界が「どうなっているのか（「心から世界」）」、「どうあってほしいのか（「世界から心」）」、また世界を「どう変え（ようとす）るのか（「双方向」）」、あるいは「そのような一致に無関係なのか（「無関与」）」、という4種類の達成意図に分類するという方法をとった（表6）⁶⁾。

表6. Searle (1983), de Sousa Melo (2002: 115–117) における「心と世界」の一致の方向

| 一致の方向 (DoF) | 特徴 | 現象 | 参考：従来の遂行動詞を用いた場合の例（英語） |
|---------------------------|--|--|--|
| 「心から世界」 (略字: M[-indl]) | 現実世界における事物に概念的思考を一致させる | 判断、主張、推測、信念の表明などを達成する言語・身体現象 | <i>Assertives</i> (a: 自己へ): state, assert, claim, suggest, hypothesize, guess, ... (b: 他者へ): answer, agree, deny, approve, admit, ... |
| 「世界から心」 (W[-orldl]) | 現実世界における事物を概念的思考に一致させる | 欲求・要求、意図、命令、などを達成する言語・身体現象 | <i>Commissives</i> (a: 自己へ): promise, commit, intend, offer, accept (to do), ... <i>Directives</i> (b: 他者へ): order, request, question, ask, permit, ... |
| 「双方向」 (D[-oublel]) | 象徴的操作により達成される（非言語的な）意図の表明行為；思考と世界の一一致を同時に満たす | 定義付け、省略、名付け、分類などの心的操作；辞任、結婚、約束などを遂行する（非言語を含む）言語・身体現象 | <i>Declaratives</i> (自己・他者へ): declare, name, sentence, christen, define, classify, abbreviate, ... |
| 「無関与」 (E[-mptyl]) | 思考と世界の一一致には関与しない（あるいは論理的思考には関与しない） | 喜び、悲しみ、感謝、憎しみなどの感情表現や、泣き笑い、怒りなどの言語・身体現象 | <i>Expressives</i> (自己・他者へ): express (joy, sorrow, anger, etc.), valueate, admire, ... |

Searle の本来の発話行為の分類においては、2種類の動詞のタイプ (commissives と directives) が「世界からことば」への一致（本稿ではさらに拡大された「世界から心」への一致）のカテゴリーに含まれている。この分類は、ある種の発話行為が話し手（自己）に何らかの将来的な行為を履行せしめるか (commissive)、あるいは聞き手（他者）にある種の行為を履行せしめるのか (directive) に基づいている⁷⁾。しかし、その他の発話行

6) いくつか事例では長い沈黙の途中で注視が起こることもあったが、このような発話行為を伴わない場合は、極力憶測は避けて以下の分析からは除外した（ただし発生率の考察には用いている）。

7) もちろん現実の会話などにおいては、話し手が聞き手に発した言葉をもとに、第三者がその行為を履行する場合もあるが、本稿で用いたタスクにおいてはそのような事態は発生し得ない。

為のタイプに関しては自他の区別をすることなく単一のカテゴリーに分類している。これは発話行為の分類としては理に適った方法かもしれないが、本稿の視線の分析においては明らかに不十分である。例えば、話し手が自らの発話に視線を随伴したのか、聞き手が話し手の発話行為に向けて視線を配布したのかを区別するには、全カテゴリーの視線配布について自己と他者という分類を設定する必要がある。それゆえ本分析では、従来の「世界から心」における2分類に加え、「心から世界」への分類においても自他の区別を用いた。したがって、例えば話し手の「判断」そのものに視線が付随したのか、その判断に対して聞き手が視線を向けたのかを区別している（表7中の(a)および(b)の分類）。ただし、「双方向」と「無関与」の2カテゴリーにおいては分類に足るだけの生起数が確保されなかったこと、これらのカテゴリーは主に話し手の発話行為に集中したことから、自他の区別を行っていない。よって、以下の観察における主な関心事は、「世界から心」と「心から世界」への2分類である。

表7. 「一致の方向」タイプにもとづく頻度分布（上）および各比率グラフ（下）

* 本表における総計は、言語的・非言語的情報の欠如により分類不可能な視線配布の例があったために、表3, 4, 5における総計とは異なっている。

| 一致の方向 | | 日本語 | | | 英語 | | |
|-------|---|-----|----|------------|----|----|------------|
| | | A | B | 小計 | A | B | 小計 |
| M | a | 43 | 35 | 78(54.9) | 50 | 47 | 97(66.9) |
| | b | 20 | 3 | 23(16.2) | 3 | 9 | 12(8.3) |
| W | a | 0 | 0 | 0(0.0) | 0 | 0 | 0(0.0) |
| | b | 16 | 14 | 30(21.1) | 15 | 16 | 31(21.4) |
| D | | 1 | 1 | 2(1.4) | 1 | 0 | 1(0.7) |
| E | | 5 | 4 | 9(6.3) | 2 | 2 | 4(2.8) |
| 総計 | | 85 | 57 | 142*(100.) | 71 | 74 | 145*(100.) |

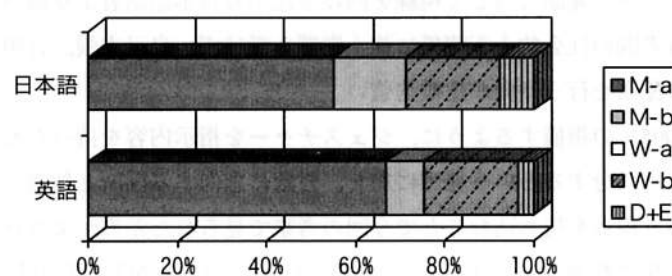


表7にみられるように、本研究における「問題解決」というタスクの性格上、総じて「世界から心」と「心から世界」の2カテゴリーに生起例が集中し、特に以下の点において明瞭な言語間較差が観察された。まず、(1)日英語間の主要な相違点は両分類の下位分類

(a)と(b)に見られ、「心から世界」への一致については、(2)日本語話者（特に社会的地位における低位者、つまり学生）の場合、他者の発話の妥当性を容認する発話（主に agree, answer, respond などに当たる発話行為；表 7 M-b）に対して視線を配布する頻度が比較的高いが、(3)英語話者は自らの下した判断（主に state, claim, suggest, hypothesize などに当たる発話行為；表 7 M-a）に視線を付与する傾向がより強かった。一方、「世界から心」への一致については、両者が協議の上物語を作り上げるという課題の性格上、(4)日英語話者とも自らの主張を既定値として強くコミットする際の視線配布は観察されず（表 7 W-a）、パートナーに質問したり、意見を求めたり、判断を仰ぐといった、聞き手からの反応を求める（directive）行為（表 7 W-b）に視線が集中することがわかった。

VI. 考察とまとめ

本研究のデータは横並び隊形という有標の配置にもとづくために、残念ながら従来の研究との単純な比較はできない。また、本予備研究においてはまだ事例数が不十分であり、本稿の主張を検証するためには、より大きなデータサイズと厳密な統計的手法を用いた追認が必要である。しかし、この予備研究における結果から、以下の点が検証すべき仮説として浮かび上がってきた。

- (1) 日・英語話者とも、視線配布は話し手の発話に付随し、発話中に視線がパートナーに到達する傾向がある。
- (2) ただし日本語話者は、視線が話し手の発話に付随する比率、発話中に対象に到達する比率のどちらも英語話者より高い。また、日本語話者は参与者間の社会的上下関係により敏感であり、同意・容認を示す場合に視線配布が生起する傾向が比較強い。
- (3) 一方英語話者は、自らの発話が終わってから視線配布を行う比率が日本語話者よりも高く、パートナーの発話に対して視線を向ける比率も日本語話者より高い。また、英語話者は参与者間の社会的上下関係に強く影響を受けず、自己主張、言明の際にパートナーに視線配布を行う傾向が比較強い。

坊農・片桐（2005）の指摘するように、ジェスチャーを指示内容を持ったものと対人的機能を持ったものに二分するという発想に加え、対象に志向する箇所と他者に志向する箇所が共起するという視点を持ち込むことで今回の考察で見られた差異がより良く理解できる。つまり、本分析で観察されたように、「一瞥・注視」の生起が発話行為後に起こる傾向が日本語よりも英語に強いという結果は、英語における叙述（つまり対象言及）と相互行為が独立して出現する傾向が強いことを示唆している。これは逆に、日本語においては叙述途中で視線が参与者に移行する傾向が強いという事実と呼応すると思われる。つまり、日本語においては純粋に叙述的な表現というものが少ない上に特定にくく、何らか

の形で対人的配慮を含む表現が文構造内に共起する傾向があることを示す（仁田 1991; Ide 2002）。つまり、対人配慮に関わるモダリティ表現が文末に生起するため、上で観察されたように、発話の後半で視線がより早く参与者に移行する誘因となったと考えることも可能と思われる。これらの結果は従来指摘されてきた日英語話者の特徴的差異と軌を一にしており、言語的特徴に加えて、視線といった非言語的特徴さえもが、同様の動機付けに影響を受けて協調的に各言語話者の意思疎通に貢献していることを示唆している。

参考文献

- Argyle, Michael & Dean, Janet. 1965. Eye-contact, distance and affiliation. *Sociometry* 28: 289–304.
- Argyle, Michael. 1988. *Bodily communication* (2nd ed.). London: Methuen.
- Burgoon, Judee. K., D. B. Buller, & W. G. Woodall. 1994. *Nonverbal communication: The unspoken dialogue* (2nd ed.). New York: HarperCollins/Greyden Press.
- Cook, Mark. 1979. Gaze and mutual gaze in social encounters. In Shirley Weitz (ed.), *Nonverbal Communication: Readings with Commentary*, 77–86. New York: Oxford University Press.
- De Sousa Melo, Candida Jaci. 2002. Possible directions of fit between mind, language and the world. In Vanderveken, Daniel & Susumu Kubo (eds.), *Essays in Speech Act Theory*, 109–117. Amsterdam: John Benjamins.
- Duncan, Starkey D., Jr., & Fiske, Donald W. 1977. *Face-to-face interaction: Research, methods, and theory*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Eibl-Eibesfeldt, Irenaus. 1975. *Ethology: The Biology of Behavior*. New York: Holt, Rinehart.
- Goodwin, Charles. 1980. Restarts, pauses, and the achievement of a state of mutual gaze at turn-beginning. *Sociological Inquiry* 50(3–4): 272–302. (Special Double Issue on Language and Social Interaction, edited by Don H. Zimmerman and Candace West.)
- _____. 1994. Professional Vision. *American Anthropologist* 96(3): 606–634.
- Gullberg, Marianne. 2003. Eye movements and gestures in human face-to-face interaction. In J. Hyönä, R. Radach, & H. Deubel (eds.), *The Mind's Eye: Cognitive and Applied Aspects of Eye Movement Research*, 685–703. Amsterdam: Elsevier.
- Hayashi, Makoto, Junko Mori, & Tomoyo Takagi. 2002. Contingent achievement of co-tellership in a Japanese conversation: an analysis of talk, gaze and gesture. In Ford, Cecilia E., Barbara A. Fox, & Sandra A. Thompson (eds.), *The Language of Turn and Sequence*, 81–122. New York: Oxford University Press.
- Hearn, G. 1957. Leadership and the Spatial Factor in Small Groups. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 269–272.
- Ide, Sachiko. 2002. The speaker's viewpoint and indexicality in a high context culture. 片岡邦好・井出祥子（共編）『文化・インターアクション・言語』, 3–20. 東京：ひつじ書房.
- Kendon, Adam. 1967. Some Functions of Gaze Direction in Social Interaction. *Acta Psychologica* 32, 1–25.
- _____. 1990. *Conducting Interaction: Patterns of Behavior in Focused Encounter*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Labov, William and David Fanshel. 1977. *Therapeutic Discourse: Psychotherapy as Conversation*. New York: Academic Press.
- Lynch, Michael. 1988. The externalized retina: Selection and mathematization in the visual documentation of objects in the life sciences. *Human Studies* 11: 201–234.
- McNeill, David. 1992. *Hand and Mind: What Gestures Reveal about Thought*. The University of Chicago

Press.

Reiss, Nira. 1985. *Speech Act Taxonomy as a Tool for Ethnographic Description: An Analysis Based on Videotapes of Continuous Behavior in Two New York Households*. Amsterdam: John Benjamins.

Schegloff, Emanuel. 1991. To Searle on conversation: A note in return. In Parret, Herman & Jef Verschueren (eds.), *(On) Searle on Conversation*, 113–128. Amsterdam: John Benjamins.

_____. 1998. Body torque. *Social Research* 65: 535–586.

Searle, John R. & Daniel Vanderveken. 1985. *Foundations of Illocutionary Logic*. Cambridge: Cambridge University Press.

Searle, John R. 1983. *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind*. Cambridge: Cambridge University Press.

Vanderveken, Daniel. 1990. *Meaning and Speech Acts. Vol. 1: Principles of Language Use*. Cambridge: Cambridge University Press.

Weisbred, W. H. 1967. Looking Behavior in a Discussion Group. *Advances in Experimental Social Psychology*, 55–98. New York: Academic Press.

浦野茂 2004年「実践の中の視覚—身体的行為と見ることの分析」山崎敬一（編）『実践エスノメソドロジー入門』158–168. 東京：有斐閣.

伝康晴・榎本美香 2005年「聞き手のちょっとした振る舞いの相互作用について」『社会言語科学会第15回大会論文集』238–241.

西阪仰 1997年『相互行為分析という視点』東京：金子書房.

仁田義雄 1991年『日本語のモダリティと人称』東京：ひつじ書房.

坊農真弓・片桐恭弘 2005年「対面コミュニケーションにおける相互行為的視点—ジェスチャー・視線・発話の協調—」『社会言語科学』第7巻第2号：3–13.

〈使用画像〉

MISTER O, by Lewis Trondheim © GUY DELCOURT PRODUCTIONS (France) / www.editions-delcourt.fr.
Published in Japan by Kodansha.